

(特別) 音楽鑑賞会**「合唱の午後」 紀尾井ホール**

4月20日(土)、初夏を感じさせる午後の陽射しを感じながら、紀尾井ホールに向かった。この日の演奏会は、日壊文化協会主催の『合唱の午後 2019』。この合唱の演奏会は今年で9回目とのことであるが、初回から全て紀尾井ホールで開催されている。特に今年は日本・オーストリア間で修好通商航海条約が締結されて150年目にあたることから「日壊友好150周年記念」と銘打った企画であり、その力の入れようが感じられる。

会場では、アイアン・クラブ会員である日壊文化協会専務理事の関澤秀哲氏(元新日鐵副社長)がホスト役を務めておられる。日壊文化協会とアイアン・クラブのご縁は、10年ほど前、関澤専務理事から、同協会が主催される音楽会に、当クラブ会員へ、鑑賞のお誘いを頂いたことが契機となって、第三事業委員会の事業として「音楽鑑賞会」がスタートした経緯がある。

以降、毎年同協会主催のいくつかの音楽会についてご

案内を頂き、当クラブの音楽鑑賞会として計画し、格別の便宜を図って頂いている。今回、日壊文化協会として記念すべき日壊友好150周年に当たり、紀尾井ホールでの「合唱の午後」を、当クラブの特別音楽会として会員各位にご案内したことは、そのような背景によるものである。

開演の13:00の15分前に席に着こうとホールに入ったが、全て自由席であるが、ほぼ満席状態で席を探すのに苦労する。合唱愛好人口の多いことを実感させられる。アイアン・クラブ関係者も23名が来ておられる。

演奏が始まると、その迫力に圧倒される思いがした。まず出演グループが多い。しかも、その各々が、プログラムの紹介を読むと、おおむね月に2回程度の練習をしているグループで、合唱専門のプロのグループではないようであるが、その歌唱の技量の高さは、素人の筆者にも強く感じられる。

出演のグループを出演順に紹介しよう。

「レディース・コア翠」 (女声18名、指揮：片野秀俊、ピアノ：木村裕平)

「男声あんさんぶる『ポパイ』」 (男声14名、指揮：大岩篤郎)

「インサラータ・ヴォカール」 (女声9名、指揮：岸信介)

「混声合唱団麗鳴」 (女声17名・男声10名、指揮：中館伸一、ピアノ：遠藤有子)

休憩を挟んで、

「Gemischter Chor TOKYO」 (女声12名・男声8名、指揮：岸信介)

「日本製鉄本社会唱団」 (女声19名・男声13名、指揮：田川理穂、ピアノ：岩井智宏)

次に、特別出演として

「埼玉県立浦和高校グリークラブ」(2・3年生合計47名に新入生も加わる、指揮：小野瀬照夫)

各グループの熱演に会場からは惜しめない拍手が贈られた。特に、「浦高」の若さ溢れる、しかも規律の取れたパフォーマンスには、客席からの万雷の拍手が止まなかった。

2回目の休憩の後は、著名なソプラノ歌手であり、東京芸術大学教授である佐々木典子氏が登場、(ピアノ伴奏は浜川潮氏)。天皇陛下御作詞・皇后陛下御作曲の「歌声の響き」、皇后陛下御作詞の「ねむの木の子守歌」か



ら始まり、次には、この日のテーマにピッタリの選曲で、ウィーン所縁のR. シュトルツ (Robert Stolz, 1880-1975) を2曲、そしてJ. シュトラウス (Johann Strauss II, 1825-1899) の喜歌劇「こうもり」の aria を華やかに歌い上げ、「ウィーンの午後」の雰囲気盛り上げる。



最後には、岸信介氏の指揮で、聴衆も一緒に歌う「全員合唱」の時間が設けられ、舞台には当日の全出演者が登場。「赤とんぼ」、次に佐々木典子氏が客席に現れ、R. ジーチンスキー (Rudolf Siczynski, 1879-1952) の



「ウィーン我が夢の街」を全出演者・聴衆と共に歌い、日興友好150周年を寿ぐ「合唱の午後」を締めくくっ

た。

岸信介氏は合唱界の重鎮であり、数多くの合唱団を指導されている。この合唱のコンサートも、シリーズのタイトルが「合唱の午後」となった第2回(2010年3月)以来、岸氏がずっと企画・構成をみておられる。岸氏と佐々木典子氏は、かつて、ほぼ同時期に、長くウィーンで多彩な活動をされており、そのころの交友のご縁があるとのことで、佐々木氏もこのシリーズには第2回以来、毎回出演されている。この日も、ぴったり息の合った「音楽」を演奏してくれた。



当日は、日本製鉄本社合唱団の団長を務める、アイアンクラブ会員の城野裕氏、会員であり第三事業委員会音楽鑑賞会担当である白神賢志氏が「日本製鉄本社合唱団」の一員としてステージに立ち、4曲を歌われた。そこで、演奏者としての苦労や当日の印象、また、当日の出演に至る経緯なども含め、「鑑賞記」プラス「演奏記」を書いて頂くこととする。なお、このシリーズに企業内合唱団が登場するのは、「三菱商事コーラス同好会」(第2回に出演)以来である。

(保倉 裕・記)

「合唱の午後」に、合唱団の一員として参加して (白神 賢志・記)

保倉さんの行き届いた鑑賞記の傍らに紙幅をいただき、演奏に参加した会員の立場から、つたない感想を述べることとなった。

昨年12月、日興文化協会の関澤専務理事から、新日鉄住金本社合唱団に「合唱の午後」への参加のお誘いがあった。同協会設立時から、当時の新日鐵と深い縁があ

ったこと、記念すべき150周年の演奏会「合唱の午後」を新日鐵ゆかりの紀尾井ホールで開催されること、企業内合唱団の参加が望まれたことなど、いくつかの背景があつてのことと思われる。

合唱界の重鎮である岸信介氏が主導されるこのようなイベントに、そして出演される各合唱団はアマチュア

とはいえ、いずれも、非常にレベルの高い合唱団であり、自分たちのような平均年齢が70歳を超える、日鉄のOB・OGを主体とする素人の高齢者合唱団が、なじむのかと悩みながら、指導者である小屋敷真先生と相談を重ねた。実は、残念なことに、小屋敷先生は、すでにほかの演奏会出演が決まっています、当日は指揮者として出演できない事情にあった。そこで、小屋敷先生の指示のもとで、副指揮者である田川里穂先生と常任のピアノ伴奏者である岩井智弘先生の同意を得て、お誘いに応じることとなった。

関澤氏によると同協会の近藤誠一理事長も、当団の参加をととても喜んでおられるとのことで、プログラムのご挨拶の中で、当団のことに、わざわざ触れてくださっている。

本年4月1日の日本製鉄株式会社発足に合わせ、当合唱団も、名称を日本製鉄本社合唱団と改めたが、この「合唱の午後」での演奏が、新しい団名のもとでの、第1回の演奏となった。それを、紀尾井ホールで行うことができ、合唱団として、記念すべき一日となった。

「みやこわすれ」というタイトルの、混声合唱とピアノのための組曲を演奏した。詩人であり、児童文学者でもある野呂昶（のろさかん）氏の「花」にちなむ詩4編をちりばめて、千原英喜氏が作曲した組曲で、野呂氏が極めて繊細に言葉を紡いでいる詩を、千原氏が、混声合唱とピアノによる、デリケートなアンサンブルとして作曲された。音の流れ、連鎖、複雑な和声と調性の変化、一つ一つのことばと音の相関、合唱とピアノが響き合う空間の創出など、アマチュアの合唱団にとって、とても難しい曲であると感じながら練習を重ねた。

88歳になられた前団長中西成美氏を先頭とする高齢者の頑張りにより、その下の世代が大きな刺激を頂き、高齢者集団なりに、指導者とともに「音楽をつくる」ことに没頭した。

15分間の演奏であるが、早朝からリハーサルを繰り返しながら、悔いのない演奏をしようと、全員が一つになって、貴重な時間を持つことができた。紀尾井ホールというこれ以上ないステージに立たせていただき、思いをすべて歌に込めて、演奏させていただいた。

自分たちの創り出すハーモニーがホールの空間を伝わり、満ちし、「心」がお客様に届いていくことを希求しながら・・・至福の喜びを感じることができたひとときであった。

ハイレベルの多彩な合唱団の集いの中で、それに伍して、高齢者なりの演奏できたね、とご評価頂ければ、参加させて頂いてよかったと、みなで、喜び合いたいと思う。

7月7日（日）には、飯田橋のトッパンホールで、第4回の定期演奏会を予定しており、日唄文化協会の計らいによる今回の合唱の集いへの参加を貴重な体験として、一層精進して、定期演奏会を、ぜひとも実りあるものとしようと、団員一同、思いを新たにしている。

日唄文化協会主催のこの「合唱の午後」のシリーズは、来年の第10回コンサートのスケジュールも決まっている。2020年4月4日（土）に紀尾井ホールで開催される。是非多くの方に楽しんで頂きたいものである。

以上

